

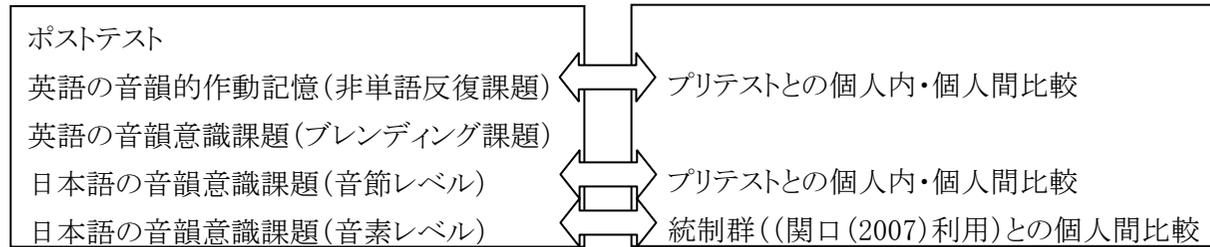
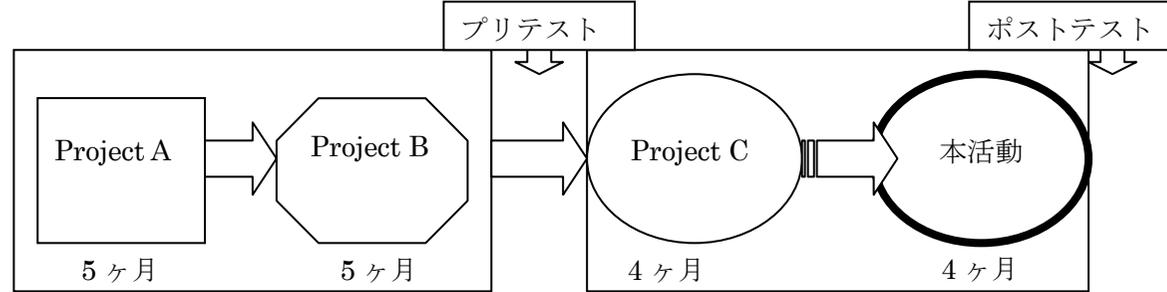
研究題目	幼少期における音韻意識に焦点化した英語の学びプログラムの開発に関する研究	報告書作成者	湯澤美紀
研究従事者	湯澤美紀・湯澤正通		
研究目的	<p>問題意識</p> <p>昨今のグローバル化による国際化の波は、英語とともに広がりつつある。それに伴い、本邦の英語の早期教育熱も過熱の一途をたどっている。しかしそれらの中には、幼児期の子どもの特性(例えば、音に対する敏感性の高さ、多感覚的な感受性の豊かさ、知的好奇心の強さ)や彼らの音韻意識の発達を考慮していないものもある。本来、外国語の習得は、新たなサウンドと出会うところから始まる。それらのサウンドとの出会いを驚きや喜びに満ちたものにし、様々な活動を通して英語の音韻意識をより確かなものにする英語の学びプログラムの提案・評価こそが、今、必要である。これが本研究の問題意識である。</p> <p>目的</p> <p>本研究は、英語の音声に対する敏感性を高めることを目的とした、2つの英語プロジェクトを経験した幼児グループを対象に行われる。彼らは既にフォニックスメソッドを通して、英語のサウンド(各音素の音)の音韻意識を多感覚的に高めている。例えば、sは、通常、エスと命名されるが(サウンドの名前)、そこでは、snake(スネーク・蛇)が、草を <i>ssssss</i> ススス(子音のみ発音)と音を立てながら進むというストーリーと、蛇を真似る動作を加えながら、sのサウンドに慣れ親しむ。これは、サウンドそのものの敏感性を高めるとともに、子ども達の多感覚的な感受性を育てるものとして、英国をはじめとする英語圏の国語教育(特に初期)で近年導入されている。</p> <p>本研究では、彼らの音韻意識を、(1)身の回りの音を探索する、(2)絵本の中の音を探索する、(3)英語の音の世界を表現するといった3つの局面からなるプロジェクトを行うことで、より確かなものし英語の音声を操作する力に変えていこうとすることが目的である。</p> <p>予想される成果</p> <p>音韻意識が発達する幼児期に、音素レベルでの操作が必要な英語を対象とした活動を行うことで、英語のみならず、日本語に関しても、音声を操作する能力が高まることが期待される。したがって、活動後に行われる、音韻意識課題・音韻的作業記憶課題において、音韻意識の向上を測定できると予想する。音韻意識は、読みの基礎となることが明らかであるので、促進された音韻意識により、読みに特化した活動をプロジェクト中に行わなくても、活動後にはある程度、英語の読みが可能となると予想される。</p> <p>予想される波及効果</p> <p>幼児期の英語活動が、英語の音韻意識のみならず、日本語の音韻意識をも高めることが明らかになれば、幼児期にふさわしい英語教育のあり方への有用な提案となる。本研究は、英語の音韻意識を育てることに注目した初期の英語学習の道筋を示すものであり、英語初学時のモデルケースを示すものである。これらは、小学校の英語教育の資料としても活用されると予想される。</p>		

研究概要報告書

(/)

研究内容

- 活動内容 本活動では、4か月の英語体験のプログラムを構成・実施し、その効果を4つの評価基準によって測定した。



- 本活動内容(活動時間 50分 英語教師と日本人教師のティームティーチング オリジナル教材・カリキュラム開発)

- 1回 1.Introducing: 2.Fruit Basket. 3.Hokey Pokey
- 2回 1. Sound Basket. 2. Humpty Dumpty. 3. Who Is There?
- 3回 1. Sound Basket. 2. Playing; The three bears and Christmas. 3. Who Is There?
- 4回 1. Picking Up the Daisies. 2. Playing; The three bears and Christmas. 3. Who Is There?
- 5回 1. Picking Up the Daisies. 2. Playing; The three bears and Christmas. 3. Who Is There?
- 6回 1. Sound Basket. 2. Craft: The three Billy goats. 3Who Is There?
- 7回 1. Sound Basket. 2. Play: The three Billy goats. 3Who Is There?
- 8回 1. Sound Basket. 2. Play: The three Billy goats. 3Who Is There?
- 9回 1. Play: The three Billy goats. 3Who Is There?
- 10回 1. Animal Basket .2. Dice Game

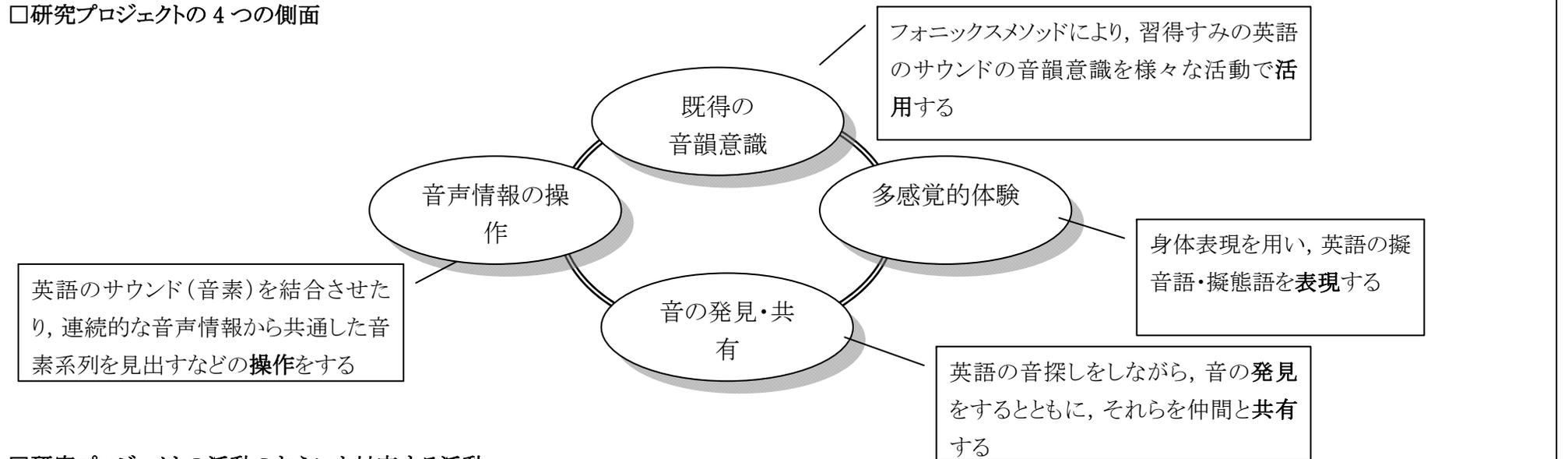


研究概要報告書

(/)

<p>研究のポイント</p>	<p>本研究では、(1)身の回りの音を探索する、(2)絵本の中の音を探索する、(3)英語の音の世界を表現するといった3つの側面に着目し、英語体験のプロジェクトを行うことで、彼らの音韻意識をより確かなものし、読みを含めた音声进行操作する力に変えていこうとすることが目的である。</p> <p>10回にわたる英語体験のプログラムを構成・実施し、その効果を4つの評価基準によって測定した。英語に関する能力の向上を明らかにするために、音韻的作動記憶ならびに音韻意識に着目した。また、英語体験で培われた音声进行操作する能力が母語に影響を及ぼす可能性を検討するために、日本語についての二つの音韻意識課題を実施した。一つは、音節レベル(例:ka(か))での音韻意識課題であった。もう一つは、音素(例:k)といったより小さな音の単位についての音韻意識を明らかにするために、音素レベルでの音韻意識課題を行った。</p>
<p>研究結果</p>	<p><u>英語に関する音韻的作動記憶の向上</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・非単語反復課題において、本プロジェクトの効果が確認された。 <p><u>英語に関する音韻意識課題について</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・3, 4, 6音素から構成される英非単語が視覚提示された場合、各音素を時間的に連続させ発音するといった音韻情報を操作する能力は、本プロジェクトの子どもの多くが可能であった。 <p><u>日本語に関する音韻意識課題の向上</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・音節レベルでの音韻意識成績は、本プロジェクト前の成績と比較した結果、向上した。 ・音素レベルでの音韻意識成績は、英語体験活動を行っていない子どもたちの成績と比較した結果、高かった。
<p>今後の課題</p>	<p>幼児期の英語活動が、英語の音韻意識のみならず、日本語の音韻意識をも高めることが明らかとなった。英語のサウンドについてその感性を高め、それら进行操作する力をつけることを目的とした本英語体験が、母語を含めた子どもたちの言語体験をより豊かにすることができたことを示す点で意義深い。さらに、本研究はそういった成果に加えて、英語初学時の一つのモデルケースとして価値があると考えられる。英語学習の入門期、特に、サウンドに対する感性と好奇心が高い時期(小学校低学年)の子どもたちに対して、幼児にとっても分かりやすく、またサウンドに焦点化した楽しい活動を、一つの英語体験学習のプログラムとして提案することにより、より教育的な価値を生み出していくと考える。したがって、本英語体験の活動の成果をもとに、教材を見直し、カリキュラムの修正を行い、小学校低学年(1・2年)の2年間の教育プログラムとして確立していくことが、今後の課題となる。</p>

□研究プロジェクトの4つの側面



□研究プロジェクトの活動のねらいと対応する活動

ねらい(1): 英語の音韻意識を利用し, 自分たちの身の回りにある音を分析する。

- ・1) 小グループで, 自分たちの名前に含まれるサウンドを収集する。
- ・2) 英語のサウンドカードを利用し, サウンドバスケットといったゲームをしながら, それらのサウンドの類似性と相違性について遊びを通して学ぶ。

ねらい(2): 自分たちの音韻意識について確認し, 自分たちが豊かな音の環境にいることに気付く。

- ・1) 韻を踏み, 類似した表現が重疊的に用いられる英語のナーサリーライムを声に出すとともに, アクションを楽しむ。

ねらい(3): 英語のオノマトペを体で表現するなど, 体と音韻意識を結び合わせ, 英語の音の世界を存分に楽しむと同時にさらに音韻意識を育む

- ・1) 擬音語・擬態語を中心とした英語絵本を読む(読みにくい文字(例: happy (一つの子音のみ発音) や mind (i を ai と発音))に出会った場合には, 外国人講師が援助を行い, 読み方を伝える。
- ・2) 擬音語・擬態語を, ドラマを演じながら身体を使って表現し, オノマトペによって作り出される音の面白さと物語のストーリーを楽しむ。

□活動の評価

英語の非単語反復課題, 英語のブレンディング課題, 日本語の音素認識課題, 日本語の音節認識課題であった。

(注: フローチャート図, ブロック図, 構成図, 写真, データ表, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)